

校本『をられぬみづ』稿 (一)

片 山 享

凡 例

一、本稿は、飯田市立図書館蔵「をられぬみづ」甲本、五冊(図書番号一〇一八〇)を底本とし、左の諸本で校合し、校異を下欄に示した。

- 1 学習院大学図書館蔵「をられぬ水」三冊(略号・学)
- 2 飯田市北原斌夫氏蔵「野中水」五冊(略号・野)
- 3 飯田市立図書館蔵「をられぬみづ」乙本、五冊(略号・乙)

ただし、学習院大学図書館本は内容的に殆ど別注であるので、校異欄の最初に注文のみを示した。

一、右の諸本は、いずれも福住清風自筆稿本であるから、その異同は本書の成立過程を示すことになる。

一、翻刻・校合に当たっては、次の方針によった。

- 1 漢字は若干の異体字を除き、当用字体によった。

- 2 仮名遣いや清濁は原本のままとした。
- 3 原本に句読点はないが、私意により加えた。
- 4 長文の異同は、校異欄に本文を略記し、次に諸本の異同を示した。全くの別文注は校異欄に記した。

5 歌頭に通し番号をつけ、歌末尾に新編国歌大観「新古今和歌集」歌番号を付した。

6 原本の丁移りを示すため各面終行に」をつけ、裏の面終行に丁数を記した。

一、本書の翻刻を許可された飯田市立図書館ならびに閲覧の機会を与えられた学習院大学図書館・北原斌夫氏に深謝しあげる。なお、本書の解説は甲南国文第33号に「福住清風』をられぬみづ』について」として掲載した。御参照頂ければ幸いである。

をられぬ水 一の巻 春歌

春立心をよみ侍りける

撰政太政大臣

一
みよし野は山もかすみてしら雪のふりにし里に春はき
にけり (一)

一二の句に本歌をとれり、春立といふはかりにや
みよし野の山も霞でけさはみゆらんとよめる、こ
のみよし野はその歌の如く、山もかすみてといふ
意也、四の句のにもしはなるにの意にて、ふりに
し里に故郷をかねたり、三の句の上にきのふまで
といふ詞のぞはる歌也

春のはしめの御歌

太上天皇¹

二
ほのく¹と春こそ空にきけらし天のかく山かすみた
な引 (二)

一四五二三とつゝけてみるへし、空には空よりの
ころにて、にとよりはたかひに意のかよふ辞也³
此ことくはしくは⁴末にいふをみてしるへし、万⁶
葉集の歌に天降^{アタリ}つく天のかく山とありて、此山は⁷

〔学〕一二ノ句に本歌をとれり、春立といふはかりに
やみよし野の山もかすみてけさはみゆらんとよめる、
此みよし野はその歌のことく、山も霞でといふ意なり

1 とれり―とり玉へり (野)

2 この―此 (野・乙)

3 意也―ころ也 (野)

4 かねたり―そへたり (乙)

5 そはる歌也―そへてみるへし (乙)

〔学〕はしめの御句を結びの御句へかけてみるへしと
いへる家つとの説はいかゝ、上の御句のひゝきにて天
のかく山にうすく霞のたな引たるよしはしられたり

1 太上天皇―太上天皇御製 (野)

2 空には空よりのころにて―空にのもしはよりの
意也 (野)

3 辞也―詞にて (野) (この次に) よりといひ
てにの意になることあり (野・乙)

4 此こと―ナシ
(乙) 5 いふをみてしるへし―いふへし (乙) 6 万葉

天よりふれる山也といへれば、空より春のくるに
よしあり

春¹のうた

式子内親王

三 山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえ／＼かゝる雪の玉
みつ (三)

三の句のにもしはなるにの意にて、たえ／＼かゝ
るは、雪²のはつかにとけたる玉水の松の戸にかゝ
るおとのたえたるかとおもへは、又かゝるお⁴との
するをいふ、いとしづかなる山家のさまにて、玉
水のおとに春⁶のきたるをしれる也

五十首歌奉りける時

宮内卿

四 かきくらし猶ふるさとの雪の中に跡こそみえね春はき
にけり (四)

雪²とふるさとの縁に跡こそみえねとはい³へり、あ
とは「しるし」といふ意にて、梅のさくも霞のたつ
も春⁴のしるし也、初句かきくらしかきくらしと⁶
詞をそへてみるへし、下句は梅⁸もさかす霞もたゝ

集の歌に「よしあり」ナシ(野) 7 此山は天よりふれる
山也といへば「天よりふれる山なれば」(乙)

〔学〕三ノ句のにもしはなるにのこゝろなり、上句に
春ともしらぬといひて、下句に春をしれることをおも
はせたる御歌なり

1 春のうた―百首歌奉りし時(学) 2 雪のはつかにと
けたる―はつかにとけたる雪の(野) 3 かゝる―かゝ
りて(乙) 4 おとのする―ナシ(野) 5 いとしづかな
る山家のさまにて―はつかに雪のとけたる(野) 6 春
のきたるをしれる也―春のきたるをしれるよし也
(野) 春をしれるよし也(乙)

〔学〕雪といひ故郷といふ縁にあとこそみえねとよめ
るにて、あとこそはしるしこそといふ意に聞ゆ、しる
しは春のしるしなり

1 中に―うちに(学・乙) 2 雪と―ナシ(野) 3 いへ
りゝみるへし―いへるにて、あとこそはしるしこそ
の意也、しるしは春のしるしをいふ(野) 4 春のしるし
也―みなはるのしるし也(乙) 5 初句かきくらし―初
句に(乙) 6 と―といふ(乙) 7 下句は―下の句は

ねと、何となく春はきにけりといふこゝろ也

立春の心を

俊成卿

五 けふといへはもろこしまても行春をみやこにのみとお

もひけるかな (五)

けふは立春の日をいふ、初句の下にこの日のもとに立てといふ詞をそへてみるへし、もろこしまてもゆくといへるより、ひゝきてそはる詞也、結句のかなはもとく意のかなにて、都にのみ春のきたることと思ひける哉、しかにはあらずといふこゝろ也

題しらす

西行法師

六 岩間とちし氷もけさはとけそめて苔の下水道もとむらん (七)

上句はこほりてある岩間の雪のとけそめたるなり、苔の上のひくき所へと流ゆく水を苔の下水といへるにて、萩の下水なといふとはいふことなり、道をもとめて水のなかれ行やうにみゆれば、みち

(野) 8 梅もさかす霞もたゝねと―霞もたゝす梅もさかねと(野) 9 こゝろ也―意也(野)〔注文末に〕初句かきくらしゝてと詞をそへて意得へし(野)

〔学〕初句の下に此日のもとに立てといふ詞をそへて見るへし、行春をのをはなるものををにて、もろこしまてもゆきわたる春なるものをいふ意なり

1 けふは―けふとは(野) 2 いふ―さしていふ(野)

3 この―此(野・乙) 4 いへる―いふ(野) 5 結句の

かなにて―三の句は行われたる春なるものをといふ意也、下句は(野) 6 春のきたる―こし(野)春のこし

(乙) 7 こゝろ也―意也(野)

〔学・ナシ〕

1 ある―ありし(野・乙) 2 苔の上の―苔の下水は

(野) 苔の下水は苔の上の(乙) 3 流れゆく水を苔の下

水といへるにて―苔の上をなかれ行みつをいふ(野)な

かれ行水をいひて(乙) 4 萩の下水―ことなり―ナシ

(野) 5 いたく―ナシ(乙) 6 道―結句は道を(野

・乙) 7 みゆれば―おもはるれば(乙) 8 みちもと

むらん―らん(野・乙)

もとむらんとうたかへるなり

述懐百首に若菜

俊成卿

七 沢におふるわかなならねといったつらに年をつむにも袖はぬれけり (一五)

わかなをつむにむかへて年をつむとはいへる也

日吉の社にのみて奉りける子日の歌

八 さく波やしかの浜松ふりにけり誰世にひける子日なるらん (一六)

一、二四五三とつゝけてみるへし、二の句はよひ出しの句にて、¹「此浜松はといふ詞のそはる格也、²しかの浜松この浜松はたか世にひける子日なるらん、³いたくふりにけりと詞をそへて意得へし、松を引は松をうゝることにて、⁴引はその物の用をいふ也、⁵早苗をとるはさなへをうゝることにて、⁶衣をたつは衣をきることも也、⁷是にてしるへし

百首歌奉りける時

家隆卿

九 谷川のうちいつる波も声たてつうくひすさそへ春の山

〔学ナシ〕〔乙・注文ナシ〕

1 わかなをつむにむかへて年をつむとはいへる也―若菜に老をかけ合せたり(野)

〔学〕三ノ句の下に此浜松はといふ詞をそへてみるへし、いにしへのことをいひて、けふしかの浦に子日することをおもはせたる歌なり、家つとの難はあたらす
1 一二四五三―三一二四五(野)

2 しかの浜松―ナシ(野) 3 この―此(野・乙) 4 子日なるらん―意得へし―とつゝけたり(野) 子日なるらん、ふりにけりとつゝけり(乙) 5 いふ也―いふ(野) いへる也(乙) 6 ことにて―こと(野) 7 きる―かふる(野) 8 是にてしるへし―ナシ(野・乙)

〔学〕初句の下に氷のひまことといふ詞をそへて見るへし、四ノ句はうくひすをもなかせよといふ意也、波もこゑたてつといふ句よりひきてしか聞ゆ、本歌

かせ (一七)

本歌谷風にとくる氷のひまことにうち出る波や春のはつ花、初句の下に氷のひまよりといふ詞をそへてみるへし、²是は本歌よりひきてそはる詞也、³うちいつる波もはうちいつる波にもて、⁴にもしをはふける格也、⁵声たてつはこゑたてさせつ也、⁶てさせのつゝめでとなるにてしるへし、⁷鶯さそへはうくひすにも声⁷をたてさせよの意にて、波に声をたてさするも春の山風のしわきなれば、鶯にも声をたてさせよと山風におほする意也、うくひすはまた谷のふるすにをる鶯⁸なれば、外よりさそひこと山風におほする心にはあらず

関路鶯

太上天皇御製

一〇 鶯のなけともいまたふる雪に杉のは白しあふ坂の関

(一八)

本歌梅かえにきる鶯春かけてなけともいまた雪はふりつゝ、¹はしめの御句の上に春かけてといふ

谷風にとくるこほりのひまことに云々

1 家隆卿—家隆朝臣(学)

2 みるへし—意得へし(野)

3 是は—そは(野)ナシ(乙)

4 うちいつるゝはふける格也—(次文)「てさせのゝしるへし」の後に「うちいつる波もはうち出る波にもる意也(野)」

5 声たてつは—声たてつはつゝめ詞にて(乙)

6 鶯さそへは—心にはあらず—うくひすさそへは鶯をもなかせよと春風におほするこゝろ也、さそふはものゝ同じやうになりて波も声をたつれば、鶯もこゑをたつるをいふ(野)

7 声たてさせよ—おほする意也—こゑたてさせよにて春の山風におほする心也、波に声をたてさするも春の山風のしわきなればかくいへり(乙)

8 鶯なれば外より—鶯をいふ、鶯を(乙)

〔学・ナシ〕

1 はしめの御句の上に—御初句の下に(野)

詞をそへてみるへし、本歌よりひゝきてそはる詞也、関路の鶯は関へ行路の鶯にて、相坂山とはこ所也、東路のさやの中山といへと此さやの中山はあつまにはあらぬ」³にてしるへし、こゝには冬より春かけて鶯のなけともあふ坂の関はいまた寒くて、ふる雪にすきの葉がしろく見ゆるといふ意也

余寒の心を

撰政太政大臣¹

一一 空は猶かすみもやらす風さえて雪けにくもる春のよの月 (二三)

そらはかすみもやらす猶風さえてとつゝけてみるへし、猶といへるにて余寒³の心と聞えたり

春山月

越 前

一二 山ふかみ猶かけ寒し春の月空かきくもり雪はふりつゝ (二四)

一四五二三とつゝけてみるへし、¹これも猶といへるにて春の月と聞えたり、猶はやはりといふ意に

2 みるへし―意得へし(野) 3 関路の鶯―関路鶯(乙)(野)は関路の鶯以下の注文ナシ 4 中山といへと此―中山なといへるにてしるへし(乙) 5 あらぬにてしるへし―あらす(乙) 6 冬より―ナシ(乙) 7 寒くて―ナシ(乙) 8 すきの葉がしろく見ゆるといふ意也―杉のはのしろく見えていと寒き所也といふこゝろなり(乙)

〔学・ナシ〕

1 撰政太政大臣―撰政(野・乙)

2 みるへし―意得へし(野・乙)

3 余寒の心―余寒(野・乙)

〔学・ナシ〕

1 これも猶―猶かけ寒し(野) 2 やはりといふ意にて―やはり(野) 3 山がふかくてといふ意なり―山ふかくといふに同し(野) (注文末尾に)みはにつきととかよふみ也(野) 山かふかさにといふ意にはあら

て山ふかみは山がふかくてといふ意なり」

水郷春望

通光卿

二三

みしま江や霜もまたひぬ芦の葉につのくむほと春風
そふく(二五)

二の句、霜もとけてまたひぬと詞をそへてみるへし、ひぬといへるよりひゝきてそはる詞也、三の句のにもじはなるにの意にて、此句にて切てみるへし、つものくむはあしのめのもえいつるにて、つものくむほと春風はあたゝかなる春風をいふ、此ほとゝいふ詞は用語よりつゝくは雅言にて、体語よりつゝくは俗語也、伊勢物語に、こゝにたとへはひえの山をはたかりかさねあけたらんほとして云々、又拾遺集の歌に、おもひやれかけひの水のたえゝゝになり行ほと心のほそさを、とあるにてしるへし、くむもたらんもゆくもみな用語なり

秀能

す(乙)

〔学〕初句のやはひ出しのやにて、そのみしまえのといふ詞のそはる格なり、しもゝまたひぬは霜もとけてまたひぬといふ意にて、是もとけてといふ詞のそはる也、さてつものくむほととある此ほとゝいふ詞は用語よりつゝくはみな雅言にて体語よりつゝくは俗語なり、三ノ句はあしの葉なるにの意にて、つものくむほとといふ詞いひしらめてたし

1 二の句―二の句は(野) 2 いへるより―いふより(野) いへるにて(乙) 3 ひゝきてそはる詞也―しか聞ゆ(乙) 4 切りてみるへし―切たり(野) きれたり(乙) 5 もえいつるにて―いつるをいふ(野) もえいつるをいひて(乙) 6 つものくむほとゝをいふ―ナシ(野) 7 春風をいふ―春風也(乙) 8 此―ナシ(野・乙) 9 詞は―詞はくむほとゆくほとたらんほとと(野) 10 つゝくは雅言にて―つゝくがさだまりにて(乙) 11 体語より―体語より露ほと山ほとと(野) 12 俗語也―俗語也としるへし(野) 13 云々―ナシ(野・乙) 14 とある―とある(野・乙) 15 くむもたらんも―用語なり―ナシ(野・乙)

一四

ゆふ月夜しほみちくらし難波江のあしのわかはをこゆるしら波 (二二六)

夕月よといひて海の上のをくらく霞たる春²のけしきをおもはせたり、夕月夜はをくらきもの物³なれはしか聞ゆ、ゆふ月夜をくらの山なといへるにてしるへし、磯⁴のあしの若葉をしら波のこゆるにて、汐のみちくることをしれるよし也、三四五一二とつゝけてみる⁵へし

春のうた

西行法師¹

一五

ふりつみし高ねのみ雪とけにけり清たき川のみつものしら波 (二二七)

とけにけりはとけにけらし也、²らしのつゝめりとなるにてしるへし、清滝川にいと清らかなるしら波のたつは、高ねの雪のとけてな³かれくるなるらしといふ意也」雪はいとしろくきよらかなるものなれはかくいへり

百首歌奉りける時

惟明親王

〔学〕かすむといはすして霞たることをおもはせる、一二ノ句いひしらすめてたし

1 いひて—いふ詞に(野) 2 春の—ナシ(野) 3 夕月夜はをくらきもの物なれはしか聞ゆ—ナシ(野) 夕月夜はをくらき物也(乙) 4 磯の—しれるよし也—をくらくてみちくる汐のめにみえねは、しほみちくらしとうたかへり(野) 5 みるへし—意得へし(乙)

〔学〕雪けの水をしら波といへるいとめてたし、ゆきけにみかさのまさりたることをいはすして聞せたる歌なり

1 西行法師—西行(乙) 2 也—の意也(野) 3 なかれくる—なかるゝ(野) 4 らしといふ意也—へしといふ意也(野) へしと也(乙) 9 雪はいとしろくゝかくいへり—ナシ(野)

〔学・ナシ〕

一六

うくひすの涙のつらうちとけてふるすなからや春を
しるらん (三一)

初句ののもしは詞¹をいひのこしたるのもしにて、
此集には此格多し、鶯²のなくはと詞をそへてみる
へし、ふるすなからは谷のふるすにありなから也、
¹³にあのつゝめ³となるにてしるへし、つらうは波
にてもし⁴つくにててもつらなりこほるをいふ

慈円大僧正

一七

天の原ふしのけふりの春のいろのかすみになひく明は
のゝ空 (三三)

あまの原は空のひろき所をいふ、け¹ふりのはけふ
りがの意にて、霞になひくはかすみの中になひく
也、の²うち³に⁴のつゝめ⁵となるにてしるへし、
明²ほのゝ空は明ほのといふことにて、空に心はな
し、春雨³の空、夕くれの空なといふ空も同じ格に
て心はなし、されと歌による也

〔野〕日かけもさらぬ谷の古巢にけさ鶯のなくはいか
て春をしりつらん、涙のつらうのうちとけたるにてし
るらんといふ意也、つらうは露にても涙にてもつらな
りて氷るをいふ(頭注)初句ニ鶯のけさなく声はと詞の
そはる格也、此集には此格多し

1 詞―心 (乙) 2 なくは―けさ 鳴声は (乙) 3 にあ
のつゝめ⁴となるにてしるへし―ナシ (乙) 4 しつ
く―露 (乙)

〔学〕霞になひくはかすみ¹にそひてなひく也、初句天
のはらとあれば、結句の空はかろくみるへし、古歌に
たゝ五月雨といふへき所をさみたれの空とよめるに同
し、けふりのはけふりかといふ意也

〔詞書〕百首歌奉し時(学) 百首歌奉りける時(野)
1 けふりのはけふりがの意にて―けふりののもしはが
の意にて春のいろは浅みとりなるいろをいふ(野) け
ふりのはがのこゝろにて(乙) 2 明ほのゝ空は―結句
は(野) 明ほのゝそらはたゝ(乙) 3 春雨の空―心はな
し―春雨の空、五月雨の空なといふも同じ格なり(野)
五月雨の空なといへるもさみたれといふことにて同じ
格也(乙) 4 されと歌による也―ナシ(野・乙)

晚霞

後徳大寺左大臣

一八 などの海の霞のまよりなかむれは入日をあらふおきつ
しら波 (三五)

初句のなごになごむといふ意をかねたり、なごむは波風のしつまりたるをいふ、春曙抄に、舟に波のかゝるさまなときはかりなごかりつる海ともみえずかしとあるにてしるへし、なごみたる海の霞のまよりなかむれは、沖にはしら波のたちていり日をあらふ春の夕くれのけしきはいひしらすといふ意也

水郷春望

太上天皇御製

一九 みわたせは山もとかすむ水無瀬川ゆふへは秋と何おも
ひけん (三六)

二の御句は日のくるゝさまにて、かすむ中にみなせ河のいちしるくみゆるけしき也、下の御句はゆふへのあはれは秋と何おもひけん³と詞をそへてみ

〔学〕なこの海は名所也、なごといふに心をつくへし、春のうみのなきたるさま也、このうたなこの海やとあるへきことなりといへる家つとの難はあたらず、なきたる海の霞のまよりといふこゝろなればかならずのといふへきところなり

〔野〕なごの海のなごになごむといふ意をそへたり、なごむは波風のなきたるをいふ、なごみたる海の霞の間よりなかむれはの意也、下句沖はあら海なればしら波のたちて入日をあらふといふ意也(頭注) 枕草紙にも、舟に波のかけたるさまなど、さはかりなごかりつる海とも見えずかしとあるにてしるへし

1 かねたり―そへたり(乙) 2 しつまりたる―しつまる(乙) 3 かゝる―かけたる(乙) 4 春の夕くれのけしきいひしらす―ナシ(乙)

〔学・ナシ〕

1 いちしるく―ナシ(野)

2 下の―四の(野)

3 何おもひけん―ナシ(野) 4 みるへし―意得へし(野)

〔注文末尾〕山もとはみな瀬川のみみ合せ也(野・乙)

るへし

春曙

家隆卿

二〇 かすみたつ末の松山ほのく波にはなるよこ雲の

空 (三七)

三二四五とつゝけてみるへし、二の句はよひ出しの句にて、その松山のといふ詞のそはる格也、波にはなるゝは末の松山のはなるゝにて、横雲のはなるゝにはあらず、松山はみとりに波はしろくはなれてみゆるはるのあけほのけしきなり、よこ雲は松山にたなひく雲をいふ、はなるゝとあるに心をつけてみるへし、横雲⁷ならはわかるゝとこそいふへけれ

五十首歌に

定家卿

二二 春のよの夢のうき橋とたえして嶺にわかるゝよこ雲の

空 (三八)

とたえしてといへるにて、春のよのみしかきことはしられたり、これは夢のにはかにさめたるをいふ、

〔学〕二ノ句をよひ出しの句といひて下にその松山のといふ詞のそはる格也、末の松山の波にはなるゝにて、よこ雲の波にはなるゝにはあらず、もしその意ならは、波にわかるゝとこそいふへきを、さはいはぬにてしるへし、家つとは誤解なり、結句はそへたる句にて明かたのけしきをいふ、なへてくらき夜の明行まゝに波はしろく松山をあをくわかれてみゆる春の曙の歌なり 1 はなるゝ波にはなるゝ(野) 2 はなるゝ波にはなるゝ(乙) 3 はるのあけほのゝナシ(野) 4 よこ雲は―よこ雲の空は明ほのゝ空の意にて(野) 5 たなひく雲をいふ―たなひける横雲なり(野) 6 つけてみるへし―つくへし(乙) 7 横雲ならはわかるゝとこそいふへけれ―ナシ(野)

(乙)

〔注文末尾〕よこ雲のはなるゝといへる説はあたらず

〔学・ナシ〕

1 これは―ナシ(野・乙) 2 をいふ―よし也(野・乙) 3 たり―たる歌也(野・乙)

夢のうき橋と横雲ととたえとわかるゝをかけ合せ
たり³

五十首歌に

二二 大空は梅の匂ひにかすみつゝくもりもはてぬ春のよの
月(四〇)

本歌でりもせずくもりもはてぬ春のよのおほろ月
夜にしくものそなき、大空¹の梅の匂ひにかすみと
いへるにて、野²にも山にも梅の咲みちたることは
しられたり、くもりもはてぬとあるに心をつくへ
し、月のほの「かにみゆるさまにて、あはれの深
き春夜のけしき也

百首歌奉りける時

二三 梅の花匂ひをうつす袖の上に軒もる月のかけそあらず
ふ(四四)

これは五条のきさいの宮の西のたいに行て去年を
恋て、月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひと
つはもとの身にして、とよめる業平朝臣になりか³

〔学〕おほ空はうめの匂ひにかすみとこと／＼しくい
ひてあまたの梅のさきたるよしをおもはせたり、本歌
でりもせずくもりもはてぬ春のよのおほろ月夜にしく
ものそなき

1 大空の——大空は(野) 2 野にも山にも——うめの野山
に(野) 梅の野にも山にも(乙) 3 「しられたり」の
次に——うめの匂ひに霞むとはこなたより見なしたる也
(野) 4 あるに——いへるに(野・乙) 5 にて——也(野)
6 あはれの深き春夜のけしき也——ナシ(野) いとあはれ
なる春夜のけしき也(乙)

〔学・ナシ〕

1 これは——是は伊勢物語の(野) 2 きさいの宮の——ナ
シ(野) 3 なりかはりて——かはりて(野) 4 こゝろ也
——うた也(野) 5 その心にてみるへし——みな其こゝろ
也(野) 6 軒もる月——しられたり——野本は末尾にあ
る) 軒もる月といへるにて人のすまて家のあれたるよ
しはしられたり(野) 7 こと——よし(乙) 8 下句は——

はりてよめるこゝろ也、後三首もその心にてみる
へし、軒⁶もる月といへるにて、女のすみすてたる
家のあれたること⁷はしられたり、下句⁸は軒もる月
のかけそ袖⁹にあらそひやとると詞をそへてみるへ
し

家隆卿

二四 梅かゝにむかしをとへは春の月こたへぬかけそ袖にう

つれる (四五)

これは梅かゝにむかしをとへは、その梅かゝもこ
たへす、春の月にむかしをとへは、その春の月も
こたへぬかけそ袖の涙にうつれると詞をそへてみ
るへし、かみ⁴へは下よりひゝきて、下へは上よりひ
ゝきてそはる詞也

通具卿

二五 梅の花たが袖ふれし匂ひそと春やむかしの月にとはゝ

や (四六)

此うめ²の匂ひはたか袖³ふれしうつりがなるそ、わ

下句(野) 9 袖にあらそひゝそへてみるへし―あらそ
ひうつると詞をそへて意得へし、上よりひゝきてそは
る詞也、うつるはむかしを恋る涙にうつる也(野)あら
そひやとると詞をそはる格にて、月のやとるはむかし
をこふる袖の涙にやとる也(乙)

〔学・ナシ〕

1 その―ナシ(野) 2 その―ナシ(野) 3 みるへし―
意得へし(野) 4 かみへは下よりひゝきて、下へは上よ
りひゝきて―上下よりひゝきて(野) 上下よりひゝき合
て(乙)

〔学・ナシ〕

1 通具卿―ナシ(乙) 2 うめの―うめの花の(野) 3
袖ふれし―ふれし袖の(野・乙) 4 なるそ―そ(野)
5 恋しく思ふ―おもふ(野) 恋る(乙) 6 うつり香なる
へし―うつりがにはあらずや(野) 匂ひにはあらずや

が恋⁵しく思ふ人の袖のう⁶つり香なるへし、そは春
やむかしの月⁷はしるらん、その月にとはゝやとい
ふ意也

俊成卿女

二六
うめの花あかぬいろかもむかしにて同しかたみの春の
よの月 (四七)

むかしにてはむかしのまゝにて也¹、のまゝにのつ
ゝめにと²なるにてしるへし、二の句あかぬいろ
かもかけもと詞をそへてみるへし、いろかもとい
へるにてそはることは也

題しらす

西行法師¹

二七
とめこかし梅さかりなる我宿をうときも人はをりにこ
そよれ (五一)

とめこかしは香をとめきてよかし也、きてよの
つゝめことなるにてしるへし、三の句のをもしは
なるものを意にて、こゝになとゝひこぬことそ
といふこと⁴をふくめたる格也⁵、下句は人は疎遠な

(乙) 7月はしるらん―月こそしるらめ(乙)

〔学・ナシ〕

1 也―の意也(野) 2 のまゝにのつゝめとなるにて
しるへし―四の句の上にその梅とゝいふ詞をそへてみ
るへし(野) 3 二の句あかぬいろかもゝみるへし―ナ
シ(野) 三の句の下に此うめとゝいふ詞をそへてみるへ
し(乙) 4 いろかもといへるにてそはることは也―ナ
シ(野・乙)

〔学〕初句は一句きりいてたる句にて、わか宿のを
はなるものををなり、二三―と句を次第して見るへ
しといへる家つとの説はいかゝ、さては上句ちからな
くて下句にかけ合す

1 西行法師―西行(野・乙) 2 意にて―こゝろにて

(乙) 3 こゝろに―此句に(野・乙) 4 ことを―意を

(野) こゝろを(乙) 5 格―歌(野) 6 下句はゝ待よし
也―ナシ(野)

るも折によるもの也といふ意にて、梅のさかりに
こぬ人をいたく待よし也

式子内親王

二八 なかめつるけふはむかしになりぬとも軒はの梅は我を
わするな (五二)

なかめつるはなかむるにて、むをめつとのへたる
詞なり」⁸過去の意のつるにはあらず、四の句軒は
の梅はかりはとことはをそへてみるへし

題しらす

八条院高倉

二九 ひとりのみなかめてちりぬ梅の花しるはかりなる人は
とひこで (五四)

本歌君ならて誰にかみせん梅の花いろをも香をも
しる人そしる、下句¹いろをもかをもしるはかりな
る人はとひこでと詞をそへてみるへし、本歌²より
ひゝきてそはる詞也

梅香留袖

有家卿¹

三〇 ちりぬれば匂ひはかりを梅の花ありとや袖に春風のふ

〔学・ナシ〕

1 過去の意のつるにはゝそへてみるへし—ナシ(野)

〔学・ナシ〕

1 下句—下句は(野)

2 本歌より—そは本歌より(野)、(乙本)本歌よりひゝ
きてそはる詞也—ナシ

〔学〕是は猶ちらしてもあかすやと風をうらみたる意
を余情にふくめたる歌也、下句の上に猶といふ詞をそ

く (五三)

をりつれは袖こそ句へうめの花ありとやこゝに驚
 のなく、此歌の詠格をとれり、二の句のをもしは
 なる物をの意にて、初句はちらしぬれは也、らし
 のつゝめりと」なるにてしるへし、一、二の句は春
 風のちらしぬれは、袖にのこる句ひはかりなるも
 のをの意也、四の句はまだありとや袖にと詞をそ
 へてみるへし、五の句は春風のふくらんなり、く
らんのつゝめくとなるにてしるへし

百首歌奉し時

源具親¹

三二 難波かたかすまぬ波もかすみけりうつるもくもるおほ
 ろ月よに (五七)

潟²はちかき所なれば波もかすまぬ也、一四五二三
 とつゞけてみるへし、結句のにもしはなれはの意³
 のにて、四⁴の句はうつるかけもくもと詞のそ
 はる格也

摂政家百首歌合に

寂蓮法師²

へてみるへし、一二の句はかせの吹てちりぬれは、袖
 に残る句ひはかりなるものをといふこゝろなり

1 有家卿—有家朝臣(学) 2 此歌—といへる哥(野)

3 とれり—とれる也(野) 4 二の句のぬれは也—ち
 りぬれは、ちらしぬれはの意にて、春風のちらした
 る也(野)

5 一二の句は春風のくにてしるへし—二の
 句は袖の句ひはかりなるものをの意にて、下句の袖を
 こゝにひゝかしたる格也、花はちらしぬれは袖に残る

句ひはかりなるものを、猶ありとや袖に春風のふくら
 んと風をうらみたる意也(野)

6 の意也—といふ意也

7 詞をそへてみるへし—詞のそはる格にて(乙)

(乙) 7 詞をそへてみるへし—詞のそはる格にて(乙)

〔学〕此歌一四五二三と句を次第して意得へし、結句
 のにもしはなれはの意のになり

1 源具親—具親(野) 2 潟はくかすまぬ也—ナシ(野)

3 意のにて—意也(野) 4 四の句はくそはる格也—

難波かたの波はちかき所なれば、かすまぬ也、下の句
 はうつるかけもくもりてみゆるおほる月夜なれはの意

也(野)

三二 今とはたのむの鴈もうちわひぬおほろ月夜の明ほの

ゝ空 (五八)

初³句今はわかれ行⁴とての意にて、三の句はうちわひぬらん⁹なり、ぬらん⁹のつゝめぬ¹となるにてしるへし、おほろ⁵月夜の春の明ほのなれは、いと⁶あはれなるけしきなり、四五一二三とつゝけてみるへし

刑部卿頼輔が歌合し侍りけるに 俊成卿

三三 きく人を涙はおつるかへる鴈鳴てゆくなるあけほの

空 (五九)

きく²人そまさりて涙はおつると詞³をそへてみるへし、そといへるにてしか聞ゆ、四⁴の句の行なるは、ゆく⁵をのへたることは也、くなる¹のつゝめく¹となるにてしるへし

婦鴈 撰 政

三四 わするなよたのむの沢をたつ鴈も稲葉の風の秋のたく

れ (六一)

〔学・ナシ〕

1 撰政家百首歌合に―百首歌合に(野) 2 寂蓮法師―寂蓮(野) 3 初句くわひぬらんなり―いまはとては今は行とて也、鴈もうちわひぬは鴈も打わひぬらんの意也(野) 4 わかれ行―ゆかねはならぬか(乙) 5 おほろ月夜くけしきなり―ナシ(野) 6 いとく―いよ(乙) 7 みるへし―意得へし(野)

〔学・ナシ〕

1 刑部卿頼輔が歌合し侍りけるに―ナシ(野) 2 〔野本・注文初めに〕きく人そのそもしに心をつけてみるへし 3 詞をそへて―四の句の―いふ意に聞ゆ、鳴といへるに鴈のかなしむ心はしられたり(野) 4 四の句の行なるは―四の句はなきて(乙) 5 ゆくをのへたることは也―ゆくといふことにてなるに意はなし(野)

〔学・ナシ〕

1 婦鴈―婦鴈を(野) 2 たのむの沢といひくしられたり―ナシ(野) 3 時なることはしられたり―さまみるか如し(乙) 4 此稲葉に風の吹―いなはを吹風の(野)

二三四五一とつゝけてみるへし、たのむの沢といひ稲葉」といへるにて、苗代の青みたる時なることはしられたり、たのむの沢をけふたつ鴈も、此稲葉に風の吹秋の夕くれにかへる契りはわするなよといふ意也⁶

百首歌奉りける時

三五 かへる鴈今はのこゝろあり明に月と花との名こそをしけれ (六二)

今はの心あり明につくと月にいひかけたる秀句ニて、いまはの心つくとは今はかへらんとおもふ心のつくといふ意也、有明の空に今はの心つきて、かへる鴈にみすてられては月花の名をれになるがをしきといふ意也

五十首歌に

定家卿

三六 霜まよふ空にしをれし鴈かねのかへるつはきに春雨そふる (六三)

・乙 5 かへる契りは―かへりくる契りを(野)かへりくるちきりは(乙) 6 いふ意也―詞をそへて意得へし(野)詞をそへてみるへし(乙)

〔学〕今はの心ありといひかけたるにはあらず、いまはのこゝろ有明につくといひかけたる秀句也、一首の意は今はの心つく鴈にみすてられては月花の名をれになるかくちをしといへる也、古今集にも、明ぬとて今はの心つくからに云々、家つとの難はあたらす

1 たる―玉へり(野) 2 秀句ニて―ナシ(野)秀句なり(乙) 3 つくとは―名をれになるが―有明につきてかへる鴈に見すてらるゝ月花の名が(野) 4 おもふ心の―おもひ(乙) 5 みすてられては月花の名をれになるがをしき―見捨られたる月と花との名こそをしけれ(乙)

〔学・ナシ〕

1 しもまよふいふ意也―霜まよふ空は霜のふる空といふこと也(野) 2 霜おきまよふいふ意也―霜のふるといふこと也(乙) 3 上句のしをれし―格にて―ナ

しもまよふは霜おきまよふのおきをはふける詞にて
 10 霜のふるといふ意也、上句のしをれしといふ
 ことを下句へひゝかし、下句の翅といふことを上
 句へひゝかしたる格にて、霜のふる空につはさの
 しをれてこし鷹の又かへる翅に春雨のふりて、し
 をれ行はあはれ也といふ意也

百首歌奉りける時

撰政太政大臣

三七
 ときはなる山の岩根にむす昔のそめぬみとり
 けるに春雨そ
 ふる (六六)

これは山の岩ねにむす昔のときはなるみとり
 めぬ春雨そふると詞を次第してみるへし、山の岩
 ねにむす昔はもとより常磐なるみとりなるに、お
 のれがそめたるやうに春雨のふるがをかしといふ
 意也

霞隔遠樹

公経卿

三八
 高瀬さす六田の淀の柳はらみとりもふかし
 かな (七二)

シ(野) 4 たる格にて一みるへし(乙) 5 しをれ行
 はしをれつゝ行と(野) 6 あはれ也とナシ(野) あ
 はれなることと(乙)

〔学〕 三ノ句の下にみとりとはいふ言葉をそへてみる
 へし、四ノ句はそめぬみとりなるにの意也、三四五ノ
 句はむす昔のみとりはおのか染ぬみとりなるに春さめ
 かそめたる顔をしてふるといふ意なり

1 撰政太政大臣ーナシ(学) 撰政(野)

2 みるへしー意得へし(野) 3 山の岩ねにむすーナシ
 (野)

4 おのれかーおのか(野) 5 ふるがをかしと一ふる
 と(野・乙)

〔学〕 初句はまくら詞也、柳はらみとりとつゝく意に
 はあらず、三ノ句にて切て見るへし、あさみとりなる
 霞の色の柳にうつりて深くみゆる意なり、題の隔とい

たか瀬さすは高瀬舟をさす也、三の句はよひいたしの句にて、その柳原はといふ詞のそはる格也、柳はこと木よりはやく青む木にて、外はまだ浅みとりなるに六田の淀はみとりも深くみえて霞むといふ意也

春歌とて

股富門院大輔

三九

春風のかすみ吹とくたえまよりみたれてなひく青柳のいと (七三)

たえまよりみえてといひかけたる歌にて、² ともたえもみたれもなひくもみないとの縁也

千五百番歌合に春歌

雅経卿

四〇

しら雲のたえまになひく青柳のかつらき山に春風ぞ吹 (七四)

青柳のかつらき山は青柳のかつらをきたる山とい意にて、青柳はかつらき山の枕詞也、是はかつらき山の「²」きたる青柳のかづらがしら雲のたえまになひきて春風のふくとこなたよりみなしたる遠

ふ意をおもしろくよみなし玉へり

1 公経卿—権中納言公経(学) 2 三の句はそはる格也—三の句にはもしをそへてみるへし(野)

〔野本頭注〕三の句はよひ出しの句にて、その柳原はといふ詞のそはる格也

3 木にて—ものにて(野・乙) 4 みえて霞むといふ意也—霞てみゆるけしき也(野)かすみたりといふ意也(乙)

〔学・ナシ〕

〔野・ナシ〕

〔野〕みたれてにみえての意をそへたり、とくたえみたれなひくみな糸の縁也

1 たる歌にて—たり(乙) 2 とくもたえもなひくも—とくたえみたれ(乙)

〔学〕青柳はかつらき山のまくら詞なるを、やかてその山の雲のたえまになひくこなたより見なしたる遠望の春のけしきにて、誠に柳のなひくにはあらず、山に柳のなきことはもとよりのことなり、題に春の題とあるにても柳のうたならぬことをおもふへし、家つとの難はあたらす

1 雅経卿—藤原雅経(学) 2 意にて—ことにて(野・乙)

3 かつらき山の—ナシ(野) 4 かつらき—春風のふくと—青柳のかつらのなひくと(野)しら雲のたえまに高間の山のきたる青柳のかつらがなひきて春風のふくのがみゆると(乙)

5 青柳の—柳の(野) 6 柳は

望のけしきにて、まことに青柳⁵のなひくにはあらず、柳⁶は山になきものなり、春⁷の歌とある題に心をつくへし

有家卿

四一 青柳のいとに玉ぬくしら露のしらすいく世の春かへぬらん (七五)

三の句の下にふりぬともといふ詞をそへてみるへし、露¹のふるに柳のふりぬることをかねたり、し²ら露のといへるのもしに意をふくめたる格にて、此集には此格多し、青柳のいとに玉ぬくとあるに心⁷をつくへし、ふりぬる柳とはみえぬけしき也⁸

宮内卿

四二 うすくこき野へのみとりの若草にあとまでみゆる雪の村消 (七六)

野への雪のはやく消たる所は若草のみとりもく、おそくきえたる所はみ²とりのうすくみゆるさま也、³下句は雪の村消のあととまでみゆるとことは

山になきものなり——しら雲のたえまにかつらき山のきたる青柳のかつらがなひきて春風のふくけしきのみゆるといふ意也(野)柳は山にはなき物なり(乙) 7 春の歌とつくへし——ナシ(野)さるからに歌に柳を山によめる儀なし(乙)

〔学・ナシ〕

1 露のふる——かねたり——野本は次文の次にくる 2 しら露のといへる——ナシ(野) 3 意を——その意を(野) 4 格にて——格也(野) 5 此集には此格多し——ナシ(野) 此集に此格多し(乙) 6 あるに——いへるに(野・乙) 7 心をつくへし——ナシ(野・乙) 8 けしき也——さまあり、しらすの下にされど——いふ詞をそへてみるへし(野・乙)

〔学・ナシ〕

1 野への雪の——みとりもうすく——雪のとく消たる所はみとりもく(野) 2 みとりの——みとりも(野・乙) 3 下句は——みるへし——ナシ(乙)跡までといへるはわか草のうすくこきみとりの上に雪の村消の跡まで残るをいふ(野)

をそへて句を次第してみるへし

西行

四三 よし山さくらか枝に雪ちりて花おそけなる春にもある
かな (七九)

ちりては花のよせ也¹、三の句の下にことしはとい
ふことはをそへてみるへし、結句年にもある哉と
ある本はわろし

野遊

家隆卿

四四 おもふとちそこともしらす行くれぬ花の宿かせ野への
うくひす (八二)

本歌おもふとち春の山へにうちむれてそこともし
ら¹²ぬ旅ねしてしが、二三の句は何といふ所¹と
もしらすゆきくれたりといふ意也

百首歌奉りける時

式子内親王

四五 今さくら咲ぬとみえてうすくもり春にかすめる世のけ
しき哉 (八三)

一二の句はもうさくらが咲たりとおもはれての意²
³

〔学・ナシ〕

〔野〕花の縁にちるとはいへり、おそけなるはおそか
るへきの意なり、かるへきのつゝめきとなるをけとは
たらかしたる詞也

1よせ—縁(乙)

〔学・ナシ〕

1所ともしらす—所かしらねとも (野) 所かしらねと
(乙)

〔学〕はるにかすめるはるにかすめるなり、二ノ
句のみえてとあるにむかへて見るへし、むらさきの色
こき時はめもはるに野なる草木そわかれさりける、是
もはるにははるかにの意也
1一二の句は—一二の句(野)

也、春にかすめるは⁴はるかにかすめるにて、春の
いろにかすめるを⁵かねたり、のいろにのつゝめに
となるにてしるへし

花の歌とて

西行

四六 よし野山去年のしをりの道かへてまたみぬかたの花を
尋ん (八六)

しをりは道しるへにて、柴なとをりてさすをいふ

春の歌とて

寂蓮

四七 かつらきや高まのさくら咲にけりたつ田のおくにかゝ
るしら雲 (八七)

咲にけりはさきにけらし也、らしのつゝめりとな
るにてしるへし、四²の句立田山のおくにと詞のそ
はる格也

百首歌奉りける時

定家卿

四八 しら雲の春はかさねてたつ田山をくらの嶺に花匂ふら
し (九一)

此かさねては¹かさなりての²なりをにとつゝめてね

2 さくらが咲たりゝ意也―桜のさきぬとみえて也(野)
3 おもはれての意也―みえて也(乙) 4 はるかにかす
めるにて―ナシ(野) 5 をかねたり―也(野)〔野本頭
注〕春にかすめるにはるかにかすめるの心をもかねた
り

〔学・ナシ〕

〔学・ナシ〕

1 春の歌とて―春歌とて(野)

2 四の句立田山のおくにと詞のそはる格也―ナシ(野)

〔学・ナシ〕

1 かさなりて―かさなりての意にて(野・乙)

2 なりをにとつゝめて―なりのつゝめになるを(野・
乙)

3 しら雲のといへるゝうるはしきをいふ―ナシ(野)

とはたらかしたる詞也、³しら雲のといへるのもし
にてしかきこゆ、⁴匂ふは花のいろのうるはしきを
いふ

題しらす

家衡朝臣

四九 よし野山花やさかりに匂ふらんふるさとさらぬ嶺のし
ら雲 (九二)

ふるさとさらぬはもとの所をさらぬといふ意にて、
猶³きのふの所に雲のかゝるをいふ、故郷はもと住
し所なれはもとの所といふ意にかり用ひたり」¹³

羈旅花

雅経卿

五〇 岩ねふみかさなる山をわけ行て花もいくへのあとのし
ら雲 (九三)

三の句のでもしにかへりみれはといふ意をふくめ
たる格なり、かさなる山と花もいくへとかけ合せ
たり

五十首歌奉りける時

五一 尋ねきて花にくらせる木間より待としもなき山のはの

4 てしかきこゆ―心をつけてみるへし(乙)

〔学〕 故郷さらぬはもとのところをさらぬといふ意
也、故郷はもと住し所なれはもとの所といふ意にかり
用ひたり、下句いとめてたし

1 家衡朝臣―家衡(野・乙) 2 意にて―意也(野・乙)
3 猶きのふの所に雲のかゝるをいふ―ナシ(野) 3 猶
きのふの所に―きのふの所ニ猶(乙) 4 かり用ひたり
―きこえたり(野・乙)〔野本注末尾〕きのふの所に猶
岑のしら雲のかゝりてあるをいふ

〔学・ナシ〕

1 てもしにかへりみれはといふ意をふくめたる格なり
―下にみれはといふ詞をそへてみるへし(野)わけすて
ゝといふてもしに見れはといふことはをふくめたる格
也(乙)

2 いくへと―いくへを(野)

3 合せたり―合せたるうた也(野)合り(乙)

〔学・ナシ〕

1 これも―ナシ(野・乙) 2 よりにいてにけりといふ
意をふくめたる格也―下に出にけりといふ詞をそへて
みるへし(野・乙) 3 月のいてんともおもはねば―ナ

月(九四)

¹これも三の句のより²にいてにけりといふ意をふくめたる格也、待としもなきは月のいてんともおもはねばまつともなきの意也、尋ねきてほとなく日⁴をくらせる木間よりおもひもかけぬ月のまつともなくいて、又花をみるといふ意也

故郷花

¹慈円大僧正「

五二 ちりちらす人もたつね故郷の露けき花に春風そふく

(九五)

²二三四一五とつゝけてみるへし、³ちりちらすはちりたりちらすしたりといふ意にて、故郷なれば花⁵もしをれて露けくさき句ふよし也⁶

千五百番歌合に

通具卿

五三 いそのかみふる野のさくら誰うゑて春は忘れぬかたみなるらん(九六)

¹いそのかみふる野のさくらむかし誰うゑて花さく春はわすられぬかたみなるらんと詞をそへてみる²

シ(野・乙) 4の意也―也(野)にてまつほともなきといふに同し(乙) 5尋ねきてゝみるといふ意也―木間より待ともなく、やかと月が出て、また花のゆみるけしき也(野) 6ほとなく―花に(乙) 7おもひもかけぬ月のまつともなくいて―待ほともなく月のいてゝ(乙)

〔学・ナシ〕

1慈円大僧正―慈円(乙) 2二三四一五とつゝけてみるへし―初句は結句へかけてみるへし(野) 3ちりちらすは―ナシ(野) 4といふ意にて―の意也(野) 5しをれて―うちしをれて(野・乙) 6さき句ふよし也―さけるさまなり(野)咲句ふなり(乙)

〔学・ナシ〕

1いそのかみゝかたみなるらんと―三の句の上にむかしといふ詞をそへ、春はの上に花さくといふ(野)二の句の下にむかしといふ詞をそへ、四の句の上に花咲といふ(乙) 2みるへし―意得へし(野) 3かたみはゝかたみにて―ナシ(野) 4むかし―ナシ(乙)〔野本末尾注文〕かたみはうゑたる人のかたみ也

へし、かたみはむかし植たる人のかたみにて、わ
すれぬはわすられぬ也、られのつゝめれとなるに
てしるへし

故郷花

秀能

五四 花そみる道の芝草ふみわけてよし野の宮の春の明ほの

(九七)

— 14

二三一四五とつゝけてみるへし、初句花をそみる
とをもしをそへてみるへし、道の芝草ふみわけて
といへるに、故郷となりてよし野の宮のあれたる
よしは聞えたり

有家卿

五五 朝日かけ匂へる山のさくら花つれなくきえぬ雪かとそ
みる (九八)

日¹かけにもつれなく消ぬ雪とみゆるは花なれば也、²

釈阿九十賀の屏風に山に桜の咲たる所

太上天皇御製

五六 さくら咲遠山とりのしたり尾の長きし日もあかぬいろ

〔学・ナシ〕

1 初句花をみるとをもしをそへてみるへし—花をそみる
は花をそみる也(野・乙) 2 故郷となりてよし野の宮
の—故郷のこゝろあり(野・乙) 3 あれたるよしは聞
えたり—あれたるさま也(野) いたくあれたるさまなり
(乙)

〔学・ナシ〕

1 日かけ—花なれば日かけ(野・乙) 2 みゆるは花な
れば也—みゆる也(野・乙) 〔野本末尾注文〕 匂へるは
いろのうるはしきをいふ

〔学・ナシ〕

1 あし引の山鳥の尾のくもらせ玉へり—人丸の哥の格
をとらせたまへり(野) 2 云々此—といへる(乙) 3
山と聞えて—遠山にて(野・乙) 4 日とあるによしあ

かな (九九)

あし引¹の山鳥の尾のしたりをの云々²、此歌の詠格
をとらせ玉へり、さくら咲遠山は日の入かたの山³
と聞えて、長々し日とあるによしあり ー

春のうた

俊成卿

五七

いくとせの春に心をつくしきぬあはれとおもへみよし
野の花 (一〇〇)

春に心をつくすは花に心をつくすにて、春ははな
のかへ詞也、古今集に、花はみな千種なからにあ
たなれと誰かは春をうらみはてたる、この歌も春
は花のかへ詞にて、春をうらみはてたるは花をう
らみはてたる也、四の句我をもあはれとおもへと
詞をそへてみるへし、三の句つくしきぬらん也、
ぬらんのつゝめぬとなるにてしるへし

百首歌に

式子内親王

五八

はかなくてすきにしかたをかそふれは花に物おもふ春
そへにける (一〇一)

り一日にかけ合(野)日といへるによくかなへり(乙)

〔学・ナシ〕

1 古今集にー古今集の歌に(野)

2 この歌もー是も(野・乙)

3 四の句我をもあはれとおもへと詞をそへてみるへし
ーナシ(野)

4 三の句ーつくしきぬは(野)三の句は(乙)

〔野本末尾注文〕あはれとおもへは我もいたく老たれ
はあはれとおもへの意也、いくとせの春に心をつくし
きぬといへるよりひゞきてしか聞ゆ

〔学・ナシ〕

1 こと也ー意也(野・乙) 2 数々に思ふなといへるも
同じ意にてー数〳〵におもふなどの数〳〵にと同じこ
とにて(野)数々におもふなどのかす〳〵と同じことに

五九

風かよふねさめの袖の花のかにかをるまぐらの春の夜の夢 (一一二)

はかなくては何のこともなくてといふこと也、¹か
そふれはは数々に思ふなといへるも同じ意にて、
よく³かん⁴がへて」¹⁵みれはといふ意也、何のこ
もなく⁵てすきこしかたの⁶ことをよく考へて⁷みれは、
⁸たゝ花に物をおもふ春を⁹あまた¹⁰へて、外には何の
おもひ出もなしといふ意也

千五百番歌合に

俊成卿女

かせかよふはねやのひまよりかよふ風也、袖の花
の香は袖にのこる花のかにて、²覚³たる夢⁴のなこり
とかけあへり、ねやのひまより風のかよひきて、
ねさめの袖の花のかに枕⁵のかをる春夜の夢⁶は、花⁷
も同じやうにあはれにはかなしといふ意也、⁸か
をるは枕のかをるにて、ゆめのかをるにはあらず

五十首歌

家隆卿

て(乙) 3 よくーとくと(野・乙) 4 かんがへてー思
ひ(野) 5 なくてーなく(野・乙) 6 のことをよくー
をとくと(野・乙) 7 考へてーおもひ(野) 8 たゝー
ナシ(野) 9 物をー物(野・乙) 10 あまたへてーのみ
へて(野・乙)

〔学〕家つとに袖のは袖かといふ意にて、花のかに袖
のかをるをいふとあり、さては夢といふこといたつら
になりて、下句ちからなし、一首の意は風の吹くる寝
覚の袖の花のかに春の夜の夢かかをるといへる也、さ
めても猶夢のなこりのかをるにて、あはれる夢をみ
しことをおもはせたり、かをるをゆめといふまでかけ
てみるへし

1 かよふ風也ー風のかよふ也(乙) 2 袖にのこる花の
かにてーねやのひまよりー花のちりし後袖にのこるか
をいふ、一首の意はすぎまの(野) 2 袖にのこるー袖
にのこりし(乙) 3 覚たるーね覚たる(乙) 4 なこり
とーなこりに(乙) 5 枕のかをるーかをる枕の(乙)
6 夢はーゆめも(乙) 7 花も同じやうにーナシ(野)花
と同じやうに(乙) 8 あはれにはかなしーあはれには
かなくて花と同じこと也(野)はかなくあはれなりしこ
とよ(乙) 9 かをるはーにはあらずーナシ(野・乙)

六〇 此ほとはしるもしらぬも玉はこのゆきかふ袖は花のか
そする (一一三)

三四の句、玉はこの道を行かふ人の袖はと詞をそ
へてみるへし、万葉集の歌に、遠かれと君をそこ
ふる玉銚の里人みなに我こひめやも、と¹あり、是
も三一二とつゞきて玉はこの道は遠かれと²詞の
そはる格也

五十首歌よみ侍りける時 俊成卿

六一 又やみんかた野のみのゝさくらかり花の雪ちる春の明
ほの (一一四)

初句のやは意のうらへかくるやにて、又やみん又
みることはあらじといふ意也、鷹狩¹にむかへて桜
かりといへるにて、かた野は狩をする所也、狩は
雪のふる時するものなれば花の雪ちるといへり

春の歌

具親 16

六二 時しもあれたのむの鷹の別れさへ花ちる比のみよし野
の里 (一一一)

〔学〕此歌家つとの難はあたらず、三ノ句の下に道を
といふ詞をそへてみるへし、万葉集の歌に遠かれと君
をそかふる玉はこの里人みなにわれこひめやも、是も
三ノ句の下に道はといふ詞のそはる歌にて、三一二と
つゞけり、又ゆふつゆにひもとく花は玉はこのたより
に見えしえにこそありけれ、是も三ノ句の下に道のと
いふ詞をそへて意得へし、みな同じ格なり
1とあり―ナシ(野・乙) 2遠かれと、詞のそはる格
也―と詞のそはる同じ格也(野)遠かれと、詞のそはる
歌にて同じ格也(乙)

〔学・ナシ〕

1鷹狩に―かた野の鷹狩に(野) かた野なれば鷹狩に
(乙) 2といへるにて―とはいへり(野・乙) 3かた
野は狩をする所也―ナシ(野・乙) 4花の雪ちるとい
へり―その縁に花の雪とはよめる也(野)花の雪ちると
はいへるなり(乙)

二三四五¹一とつゝけてみるへし、初句は時²しもあ
るへきことなれといふこと也、るへきことなれの
つゝめれとなるにてしるへし、三³の句の下にそひ
てといふ詞⁴をそへてみるへし、たのむの鴈のわか
れさへそひて花ちる比⁵はいとゝ心つくしなるに、
鴈のわかれば外に時⁵しもあるへきことなれといふ
こゝろなり

題しらす

西行

六三

なかむとて花にもいたくなれぬれはちる別れこそかな
しかりけれ(一二二六)

¹これも別れこそといへる下にそひてといふ詞をそ
へてみるへし、なかむとておもしろき花にもいた
くなれぬれは、ちる²わかれがそひてかなしといふ
意也

越前

〔学・ナシ〕

1 二三四五一とつゝけてみるへし—野本注文末にあり

2 時しも—時も(野)

3 三の句の下にく心つくしなるに—ナシ(野)

4 詞をそへてみるへし—ことをふくめたる格也(乙)

5 時しも—時も(野・乙)

6 といふこゝろなり—の意也(野・乙)

〔野本頭注〕初句は鴈のわかれにかけてみるへし、三
の句の下にそひてといふ詞をそへてみるへし

〔学〕此歌花にもとあるに心をつけて見るへし、春に
わかるゝことのをしきこゝろをそへたり、よく考へみ
るへし、西行にはこのふりの歌多し、家つとの注はい
たくあやまれり

〔野〕にもといへるに心をつけてみるへし、なかむと
て鴈にもいたく馴れぬれは、かへるわかれこそかなしか
りけれといふこゝろのそはるてにをは也〔頭注〕又一
説おもしろき花にもいたくなれぬれとはいふ意にも聞
ゆ

1 これもゝそへてみるへし—ナシ(乙)

2 ちる—またちる(乙)

3 かなし—かなしかりけり(乙)

六四 山さとの庭より外の道もがな花ちりぬやと人もこそと

へ (一二七)

一四五二三とつゝけてみるへし、二三の句は、ちりしく花を人にふまれんことのをしければ、庭より外にかよふ道のあれかしとねかふ意也、庭に花のちりしきたることをいはすしてしか聞せたり、人もこそとへはひとこそとはめ也、はめのつゝめへとなるにてしるへし

湖上花

宮内卿

六五 花さそふひらの山かせ吹にけりこきゆく舟のあとみゆるまで (一二八)

四五一二三とつゝけてみるへし、吹にけりは吹にけらしにて、風のふきしことをおしはかりてしれる也、らしのつゝめりとなるにてしるへし、こき行舟はあとのみえるもの、なるをあとのみゆるといへるにて、湖に花のちりうきたることはきこえたり

〔学・ナシ〕

1 のをしければ―ををしみて(野)

2 庭―此庭(野)

3 ねかふ意也―ねかへる也(乙)

4 庭に花のちり―聞せたり―ナシ(野)

5 しか―ナシ(乙)

6 也―のこゝろ也(野)

〔学〕三ノ句のけりはおしはかりて定めたるけり也、

四五一二三と句を次第してみるへし、湖上に花のちりうかみたることをいはすして聞せたるうた也

1 吹にけりは吹にけらし―けりはけらし(野)

2 らしのつゝめりとなるにてしるへし―ナシ(野)

3 あとのみえぬものなるをあとのみゆる―あとみゆるまでと(野)

4 きこえたり―しられたり(野)

関路花

六六 あふ坂や木末の花をふくからにあらしそかすむ関の杉
むら (一二九)

二の句、嶺の梢の花をと詞をそへてみるへし、嶺²
よりあらしの吹おろすあふ坂山の花に、みとりな
る関の杉むらのしろく霞てみゆるけしき也⁴

春歌

二条院さぬき

六七 山たかみ嶺のあらしにちる花の月にあまきる明かたの
空 (一三〇)

あまきるは空のくもるをいひて、さへきるなどの
きると同じ意也、月はみえなからちる花の空にあ
まきりたる春の明かたのけしき也³

最勝四天王院障子に、吉野山かきたる所

太上天皇御製

六八 みよし野の高ねのさくら散にけりあらしもしろき春の
明ほの (一三三)

四五一二三とつゝけてみるへし、ちりにけりはち

〔学・ナシ〕

1 二の句、嶺の梢の花をと詞をそへてみるへし—梢の
花は嶺にて関の杉村とはこと所也(野)

2 嶺より—ナシ(野)

3 あふ坂山の—ナシ(野・乙)

4 関の—ナシ(乙)

〔学・ナシ〕

1 いひて—いふ(野)

2 さへきる—けしき也—ナシ(野)

3 春の—ナシ(乙)

〔学・ナシ〕

1 四五一二三とつゝけてみるへし—ナシ(野)

りにけらし也、らしのつゝめりとなるにてしるへし、ものゝよくも見えわかぬ明ほのなれは、らしとうたかはせたまへる也

千五百番歌合に

定家卿

六九 さくらいろの庭の春風あともなしとはゝそ人の雪とたにみん (一三四)

花をちらす¹風なれはさくらいろとはいへる²にて、あともなしは梢には吹³たるあともなしの意也、下⁴句はとはゝそ人の雪となりともみんか、とても花とは見じといふ意也、これまでの四首は歌意も大かた同し

— 18

ひとゝせ忍ひて大内の花見にまかりしに、庭にちりて侍りし花を硯のふたにいれて、摂政のものとつかはし侍りし 太上天皇御製

七〇 けふたにも庭をさかりとうつる花消すはありとも雪かともみよ (一三五)

本歌、けふこすはあすは雪とそふりなまし消すは

2 よくも—よく(野・乙)

3 らしとうたかはせたまへる也—らんとはうたかひ玉ふ也(野)

〔学・ナシ〕

1 ちらす—さそふ(野)

2 いへるにて—いへり(野・乙)

3 吹たる—風の吹たる(野)

4 下句はゝ大かた同し—雪とたにみんは雪となりともみんか、よも花とはみじといふ意也(野) 結句は花とはみるまじ、雪とたにみんかと詞をそへてみるへし、だにはなりとも也(乙)

〔学〕本歌、けふこすはあすは雪とそふりなまし消すはありとも花と見ましや、初句は本歌にけふこすとはあるけふにあたりて、そのけふたにもといふ意なり、けふは本歌にては、また花のさかりなる日をいふ、四ノ句の下に本歌の花とみましやといふ句をそへてみるへし、またはなの色のをられぬ水にさすさをの宇も句ふうちの河長といふ歌も本歌の袖やぬれなんといふ句を二ノ句の下にそへてみる同じ格の歌也、一首の意は本歌にけふこすとはある、そのけふたにも庭をさかり

七二

ありとも花とみましや、上の御句は本歌のけふは
まだ花のちらぬ日なるに、そのけふたにも庭をさ
かりとは⁵なのはかなくちるといふ意也、四の御句
の下に本歌の花とみましやといふ句をそへてみる
へし、これは本歌よりひゝきてそはる詞也、下の⁷
御句は消すはありとも花とはみるまじ、せめて雪
かともみよといふ意也

御かへし

撰政太政大臣

「

さそはれぬ人のためとやのこりけんあすよりさきの花
のしら雪 (一三六)

四五一二三とつゝけてみるへし、下句は本歌にあ
すはゆきとそふりなましとある、そのあすよりさ¹
きにはかなくちりし此花のしら雪といふ意にてか
け、歌の上の御句をうけたり、三の句は消のこり³
けんと詞をそへてみるへし、一二の句はさそはれ⁵
ぬ我ためとやの意也

家の八重桜ををらせて、惟明親王のもとに遣し

とうつろふ花なれば雪かともみよ、消すはありとも花
とはみるましといふ意なり

1 しに―侍しに(学) 2 ちりて侍りし―ちりたる(学)

3 太上天皇御製―太上天皇(学) 4 なるに―なるを(野)

5 はなのはかなく―花の(野) はかなく花の(乙)

6 みるへし―意得へし(野)

7 これは―そはる詞也―ナシ(野) これは―こは(乙)

8 下の御句―下御句(野・乙)

9 花とはみるまじ―花とみましや(野)

〔学〕四ノ句は、本歌にあすは雪とそふりなましとあ
る、そのあすよりさきといふ意にて、あすよりさき
はけふをいふ、一首の意は、本歌にあすは雪とそふり
なましといひしそのあすよりさきにちるはかりはかな
きはな雪なれと、さそはれさりし我ためにとてか消
残りけんといへるなり

1 さきにはかなくちりし此花の―さきの花の(野)

2 ちりし―ちれる(乙)

3 をうけたり―と同じ意也(野・乙)

4 三の句は―そへてみるへし―ナシ(野)

4 三の句は―三の句(乙)

5 一二の句は―の意也―ナシ(野・乙)

ける

式子内親王

七二 八重匂ふ軒はのさくらうつろひぬ風よりさきに人のと

へかし (一三七)

上句やへに咲匂ふ花なれば、ひとへさくらの如く¹
はかなくはちらじと思ひしに、はやいろのうつろ³
ひかはれりと也、下句は今吹ん風にみなちるへけ⁵
れは、その風よりさきにはやとへ⁶かしといふ⁷
意にて、とへとやへとをかけ合たり

かへし

惟明親王

七三 つらきかなうつろふまでに八重さくらとへともいはて

すくる心は (一三八)

三三四五一とつゝけてみるへし、二の句はうつろ¹
ふまてになるにの意なり、³になるにのつゝめにと
なるにてしるへし、是も八重ととへとを⁶かけ合⁷
たり

家隆卿

〔学・ナシ〕

1 上句―上句は(野・乙) 2 咲匂ふ―匂ふ(野)

3 はかなくは―とくは(野・乙)

4 いろのうつろひかはれりと也―うつろひぬといふ意也(野) うつろひたりといふ意にて(乙)

5 下句は―かけ合たり―うつろふはこゝにてはいろのかはるをいふ(野)

6 はや―ナシ(乙)

7 意にて―かけ合たり―こゝろ也(乙)

〔学・ナシ〕

1 三三四五一とつゝみるへし―ナシ(野)

2 二の句は―二の句(野)

3 になるに―なるぬるに(野・乙)

4 になるにの―なりぬるにの(野) になりぬるにの(乙)
5 是も―ナシ(野・乙)

6 とへとを―とへを(野)とへと(乙)

7 かけ合せたり―かけあへり(乙)

七四

さくら花夢かうつゝかしら雲のたえてつれなき嶺の春風（一三九）

風ふけはみねにわかるゝしら雲のたえてつれなき
君か心か、此歌の三四の句をとれり、夢かうつゝ
かしらぬといひかけたるにはあらず、二の句にて
きたり、三四五一二とつゝけてみるへし、しら
雲のたゆるは」花のちるといひて、下句はえもい
はすつれなきみねの春風そといたくうらみたる意
也

題しらす

俊成卿女

七五

うらみすようき世を花のいとひつゝさそふ風あらはと
思ひけるをは（一四〇）

二三四五一とつゝく意にて、さそふ水あらはいな
んとぞ思ふといへる小町か歌の詠格をとれり、下
句はさそふ風あらはいなんとおもひてちりけるを
はと詞をそへてみるへし、四の句のいなんははふ
ける詞にて、結句はつゝめたる格也、ひてちりの

〔学・ナシ〕

1 三四の句をとれり―詞をとれり（野）

2 夢かうつゝかゝあらず―たえてつれなきはいふにも
いはれぬほとつれなきといふ意也（野）うつゝかしらぬ
といひかけたる秀句にはあらず（乙）

3 三四五一二とくうらみたる意也―ナシ（野）

3 三四五一二とつゝけてみるへし―乙本は夢かうつ
ゝかの前にある

4 といひて―をいふ（乙）

5 えもいはす―いふにもいはれず（乙）

〔学・ナシ〕

1 さそふ―小町かさそふ（野）

2 いへる小町か―いふ（野）

3 下句は―下句（野）四の句は（乙）

4 とおもひてゝみるへし―おもふをはといふ意也（野）
とゝ詞をそへてみるへし（乙）

5 四の句のゝ格也―ナシ（野）五の句はおもひてちりけ
るをは也（乙）

6 ひてちりのつゝめひと―ひけるのつゝめふと（野）

つゝめひとなるにてしるへし

後徳大寺左大臣

七六 はかなさを外にもいはしくら花咲てはちりぬあはれ

世の中 (一四一)

三四五一二とつゝけてみるへし、外にもものゝし

はかろし、¹二の句ははかなさを外の物にはい

はじの意也⁵

花の歌とて

殷富門院大輔

七七 花もまた別れん春はおもひいてよ咲ちるたひの心つく

しを (一四三)

一二四五三とつゝけてみるへし、二の句はしに別

ん春はの意也

千五百番歌合に

良平朝臣¹

七八 ちる花のわすれかたみの嶺の雲そをたにのこせ春の山

風 (一四四)

そをたにのこせは、²それをなりともものこせのこ³

ろ也

〔学・ナシ〕

1 三四五一二ゝみるへし―(野本注文末尾にある)

2 もゝし―も(野)

3 一二の句は―ナシ(野)

4 外の物には―花より外には(野)桜より外のものには

(乙)

5 の意也―と也(乙)

〔学・ナシ〕

1 つゝけてみるへし―つゝく意也(野)

2 二の句はゝ意也―ナシ(野)

〔学・ナシ〕

1 良平朝臣―良平(野・乙)

2 のこせ―ナシ(野) 3 こゝろ也―意也(野)

落花

雅經卿

七九 花さそふなこりを雲に吹とめてしはしは匂へ春のやま
かせ(一四五)

上句は吹さそふ花のなこりを雲にとめてと詞を次第してのもしをそへてみるへし、花のなこりは花の匂ひ也、下に匂へとあるにてしられたり、結句にさらは「花とみて心をなくさめんといふ意をふくめたり

残春の心を

撰政太政大臣¹

八〇 よし野山花のふるさとあとたえて空しき枝に春風そふ
く(一四七)

風にさそはれ行たる花のあとを花のふるさとへはいふ也、あとたえては花を見にこし人の跡のたえたるにて、故郷の縁也、下句は花もなき枝にうらめしく春風のふくをいふ

百首歌の中に

式子内親王

八一 花はちりそのいろとなくなかむれば空しきそらに春雨

〔学・ナシ〕

1 上句は「そへてみるへし」なこりは風のなこり也、さそふといへるにてしか聞ゆ(野)一二の句さそふ花のなこりをと次第してみるへし(乙)

2 花のなこりは花の匂ひ也―ナシ(野)

3 匂ひ―か(乙)

4 下に匂へとあるにてしられたり―ナシ(野・乙)

5 ふくめたり―ふくめたる歌なり(野)

〔学・ナシ〕

1 撰政太政大臣―撰政(野)

2 行たる花の―て外へ花のちり行たる(野)てちりゆきたる花の(乙)

3 いふ也―いへり(野)

4 花を見に―花みに(野)

5 花もなき枝に―散はてたる花の枝に(野・乙)

6 うらめしく―さひしく(野)

7 ふく―吹のくる(乙)

そふる (一四九)

花はちりといへるにちからのおちたるさまあり、
そのいろとなくはその花となくの意²にて、いろは
花のかへ詞也、下句³は花に別れたる折からのさひ
しき春のけしき⁴に²にて、むなしき空にはむなし
き空よりの意なり、此にもしのことさきにもいへ
り、久かたの雲に高まの山さくら匂ふもよそのみ
ねの春風、この歌の雲に高間⁵のも雲より高まのと
いふ意にて同じ格也、またあしへよりみちくる汐⁶
のいやましに君に心をおもひますかな、此うたの
あしへよりはあしへにの意²にて、にとよりはたか
ひにこゝろのかよふ辞也

千五百番歌合に

寂蓮法師

八二 おもひたつ鳥は古巢¹もたのむらん²なれぬる花のあとの
夕暮 (一五四)

上句は思ひ立てかへる鶯²はふるすをたのみに思³
ふらんといいふ意にて、下句⁴はなれぬる花のあとの

〔学・ナシ〕

1 さまあり―心あり(野)

2 意―ナシ(野・乙)

3 下句は花にさきにもいへり―空には空よりの意に
て、にとよりはたかひにこゝろのかよふことは也(野)
4 けしきにて―(の次に)いよ―花のをしまるゝ心を
そへたり、四の句は(乙)

5 雲に高間のも―二の句も(野)

6 あしへより―かよふ辞也―にの意によりといへる歌
あり、米にいふへし(野)

〔野本末尾注文〕下句は花に別れし折からのさひしき
春のけしき也(底本は前にあり)

〔学・ナシ〕

1 寂蓮法師―寂蓮(野・乙)

2 ふるすをたのみに―古巢をもたのみに(野・乙)

3 思ふらんといいふ意にて―すらんといふ意也(野)

4 下句はなれぬるさひしけれと―結句に我はさひし
さにたへかねて(野) 下句のはてに我はさひしけれと
(乙)

5 意也―意をふくめたるうたなり(野・乙)

ゆふくれはさひしけれど、身のやり所もなしといふ意也⁵

「

八三

ちりにけりあはれうらみの誰なれば花のあとゝふ春の山かせ(一五五)

散にけりはちらしにけり也¹、らしのつゝめりとなるにてしるへし、うらみの誰なればうらみの誰にあはれ也²、にあのつゝめなとなるにてしるへし、結句にならんといふ詞のそはる格也⁴、ちらしにけりあはれぞのうらみの誰にあはれ花の跡とふ春の山風ならんとかせをいたくうらみたるこゝろ也⁶

公経卿

八四

春深くたつね入さの山のはにほのみし雲のいろそのこれる(一五六)

春深くたつね入は、三月の末にちりのこる花やあるとて山に尋ね入也²、ほのみし雲のいろは咲そめたるこる山に尋ね入て、はつかにみし花いふ、春ふかく」かたつね入といひて、咲そめたる時にたつ

〔学〕初句は一句切いてたる句にて、結句になるそといふ詞のそはる歌也、ちりにけりあはれうらみの誰なれば花のあとゝふ春の山風なるそ、そは誰にてもなく、おのかしわざなるものをと意のうらへかくるてにをはなり

1 也―の意也(野)

2 也―の意也(野)

3 結句に―結ひの句に(野)

4 格也―歌也(乙)

5 そのうらみの―そのちらしたるうらみ(野・乙)

6 とかせをいたく―おのがしわざならすやと風を(野)おのれかしわざなるものをと風をいたく(乙)

〔学・ナシ〕

1 とて―と(野・乙)

2 也―をいふ(野)

3 山に―ナシ(野)

4 はつかにみし花をいふ―ほのかにみし花のいろ也(野)

5 咲そめたる時に―さきそめし比も(野)

ね入しことをきかせ、ほのみし雲のいろそのこれ
るといひてちりのこりたる花を尋ねたることを
聞せたり

百首歌奉りける時 摂政太政大臣¹

八五 はつせ山うつろふ花に春くれてまかひし雲を嶺にのこ
れる (一五七)

うつろふ花に春くれてといつるにて、のこらす花
のちりたることはしられたり、まかひし雲はさか
ぬまに花にまかひし雲なり、その雲の嶺にのこる
といひて又散残りたる花にまかひてみゆることを
聞せたり

家隆卿

八六 よしの川きしの山吹ききにけり嶺のさくらはちりはて
ぬらん (一五八)

四の句の上によしの山といふ詞をそへてみるへし、
是は¹、よし野川といふよりひゝきてそはる詞也、
よし野川とよしの山と岸と嶺と山吹と桜と咲とち²

6 いひて―いへるにて(野)

7 のこりたる―残る(野)

8 を聞せたり―はしられたり(野)

〔学・ナシ〕

1 摂政太政大臣―摂政(野・乙)

2 のこらす花の―花はのこらす(野)

3 ちりたることは―ちりはてたること(野) ちりはてた
ることは(乙)

4 しられたり―聞えたり(乙)

5 さかぬまに―まださかぬほとに(野) またさかぬまに

(乙) 6 なり―をいふ(野)

7 雲の嶺にのこるといひて又―雲が又嶺に残りゐて

(野) 8 のこる―のこれる(乙)

9 まかひてみゆることを聞せたり―まかふといふ意也

(野) 10 こと―よし(乙) 〔野本末尾注文〕花に春くれ

ては花の春のくれたるにて、三月尽のことにはあらず

〔学・ナシ〕

1 是は―ナシ(野)

2 よし野川と―是はよし野川と(野)

るとを対にとれるうた也

俊成卿

八七 駒とめて猶水かはん山ふきの花の露そふ井手の玉川

(二五九)

猶といへるに心をつくへし、今まで駒に水をかひて山吹の花をみてありしことはしられたり、四の句は花の露の玉そふと詞をそへてみるへし、そふといひ玉川といへるにてしか聞えたり、山吹の露の玉そふ玉河の水を駒に猶かひて今しはし花をみて行んといふ意也

五十首歌奉りける時

寂蓮法師

八八 くれて行春のみなとはしらねとも霞におつるうちの柴

舟(二六九)

— 23

春のみなとは春のとまりといふ意にて舟のよせ也、四の句のおつるといへるに心をつくへし、霞の中になかれ行柴舟の一片はかりにみゆるさま也、三の句の下にそのくれて行春はといふ詞をそへて、

〔学〕猶といふにそまで花を見てありしことをおもふへし、一二ノ句にいましはし花をみんといふ意をそへたり、是は本歌よりうつりていくる情なり、花の露そふは花の露の玉か玉河ニちりそふといふ意なり、そふといひ玉河といふにてしか聞えたり、本歌さひのくまひのくま河に駒とめて駒に水かへそのまにもみん
1 に心をつくへし—にて(野)
2 みてありし—みし(野)
3 詞をそへてみるへし—いふ意也(野)
4 しか聞えたり—しか聞ゆ(野)そはる詞也(乙)
5 猶かひて今しはし—かひて我も猶(野)猶かひて我も今しはし(乙)

〔学・ナシ〕

1 舟の—みなとは舟の(野)
2 四の句の—さま也—(野本三の句の次にあり)
3 心をつくへし—心をつけてみるへし(野)
4 霞の中に—霞に(野・乙)
5 さま也—けしき也(乙)
6 詞をそへて—詞のそはるうたなり(野)詞をそへ(乙)
7 又—ナシ(乙) 7又五の句くみるへし—ナシ(野)
8 くれて—くれ(野)
9 とみなしてをしむ意也—に見なしてをしむ心ふかし

又五の句の下にもならんといふ詞をそへてみるへ
し、宇治の柴舟をくれて行春とみなしてをしむ意
也

八九

山家暮春

宮内卿

柴の戸をさすや日かけのなこりなく春くれかゝる
山のはの雲(一七三)

さすは柴の戸をさすにて、日かけのさすをか
ねたり、かゝるは春の暮かゝるにて、山のはの
雲のかゝるをかねたり、山のはに雲のかゝる故
にさす日かけもなこりなくかけりて、春のはや
くくるゝさま也

九〇

百首歌奉りける時

撰政太政大臣

あすよりはしかの花園まれにたに誰かはとはん春のふ
る里(一七四)

春の故郷は春のくれ行たる跡をいふ、けふはまだ

(野)に見なしたる歌にてをしむ心ふかし(乙)

〔学〕初句はさすといはん料にて山家をかねたり、雲
にへたゝりて早く日かけのかけるひしさまなり、
〔飯田市立図書館甲・乙本ナシ、野中水にて補う〕

〔学・ナシ〕

- 1 撰政太政大臣―撰政(野・乙)
- 2 行たる―ゆきし(野)
- 3 花もあれば人めもみれと―花見かてらに人もくれと
(野)花をみがてらくる人もあれと(乙)

花³もあれは人めもみれと、あすよりは春⁴のふるさ
ととなれはしかの花園をまれにも誰かはと⁵はんと⁶
いふ意也

(春歌終)

4 春のふるさとなれは―ナシ(野)

5 にも―たに(野・乙)

6 といふ意也―春のふるさととなれはといふ意也(野)